

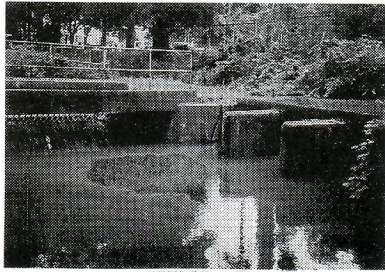
# ねりまの文化財

## 特集 「千川上水現況調査報告」

この報告は、練馬区教育委員会が平成15年7月から10月に実施した、文化財講座「千川上水・田柄用水の現況を調べてみよう」に参加した区民ボランティアの方々が調査し、まとめたものの一部を掲載しました。

### ■ 上流編

(新旧取水口く西武新宿線交差)



現取水口

千川上水の取水口は、創設された元禄時代以後、何度かその位置を変えています。現在の取水口は、五日市街道と境調布

線が交差する境橋交差点の玉川上水右岸「東京都北多摩南部建設事務所武蔵野区」(武蔵野市境四・11)の敷地内にあります。取水堰は鉄筋コンクリート製で、玉川上水に対して直角に開口しています。創設当時の取水口がどのへんにあったかは、不明です。ただ、武蔵高等学校編『千川上水』(本流)当時の旧取水口跡(明治4年(一八七二)から昭和41年(一九六六)まで使用)は、境橋から約500mほど上流、曙橋から少し遡った小金井堤の左岸に見つけることができます。玉川上水に先端切石積の分水堤が突きだし、その突堤の根元付近に高さ1m30cmの赤錆たゲートの巻揚器がひっそりと佇んでいます。ところで千川上水研究の基本資料「千川上水路図」を解説した『千川上水路図解説』(千川の会編・クオリ発行)では旧取水口はこのほかにもう一つ

練馬区教育委員会  
生涯学習課  
(文化財係)  
☎ 3 9 9 3 - 1 1 1 1  
〒 1 7 6 - 8 5 0 1  
練馬区豊玉北6-12-1

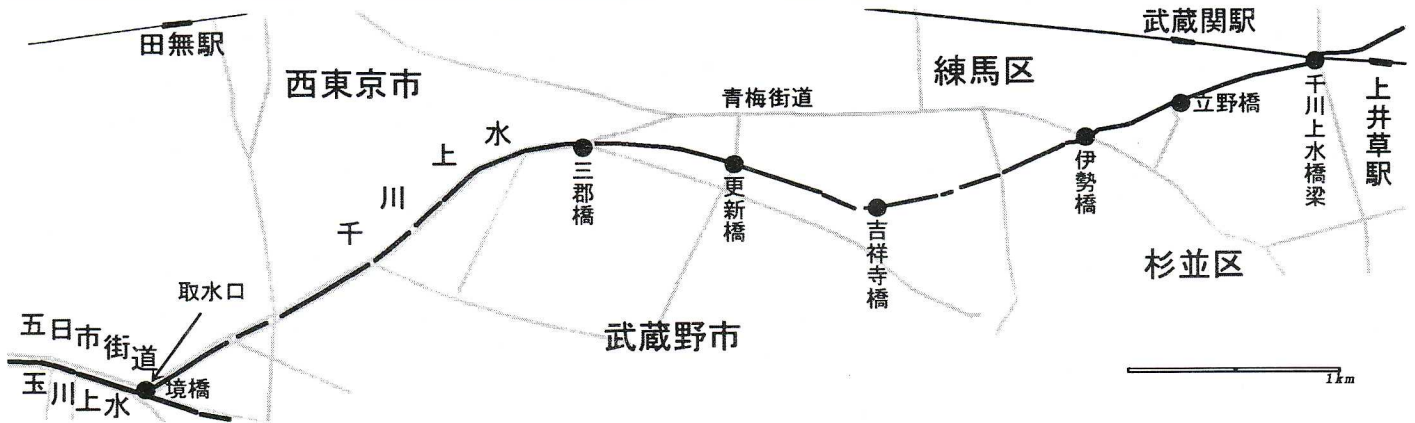
存在すると指摘しています。明治13年(一八八〇)に千川水道株式会社が増設し明治40年(一九〇七)年まで用いられていた取水口で、その遺構は最初の旧取水口から徒歩で90歩ほど上流の、左岸のシユロの茂みの中に残置されています。分水堤は埋もれかかき、その背後に、最初の旧取水口よりやや小さめのやはり赤錆たゲート巻揚器があります。

### 平井家水車

取水堰から取り込んだ水は、五日市街道下り線の道路下に埋められた内径1mのヒューム管を伝って石積み護岸堤の開口から千川上水へ流れ込みます。この開口部真上の堤に、自然石に「千川上水 清流の復活」と刻まれた碑が建っています。ここから下流の「伊勢(殿)橋」(練馬区関町南三丁目)までの開渠区間約5kmが、清流の復活区間です。清流は、ここから関前橋(武蔵野市八幡町)まで北東に約2.1km、一直線に流れ下ります。前出『千川上水路図解説』をはじめ諸々の文献には、かつてこの区間の左岸に、二基

の水車が存在していたことを記しています。水車を創設したのは上保谷新田名主・平井伊左衛門といわれています。伊左衛門は、天保6年(一八三五)、上保谷新田が上保谷村から独立して一村となり、主導的役割を果たし、以後、平井家はこの一帯に大きな影響力を及ぼす一族でした。なんら水車の遺構が残っておらず、水車を営業していた平井家も昭和初めにこの地を離れてしまい、水車の場所を特定することは困難でした。千川上水沿いの鮎店(西東京市新町四丁目)の隣にお住まいの平井一族の平井嘉市氏に水車の件を尋ねると、「二つ目の水車については分かりませんが、上流の水車はこの先の安間(やすま)さん宅にありました」とのことです。同氏の話によると、平井氏宅前から下流の安間氏宅まで約400m水を引き、この用水で水車を回していたとのこと。西東京市新町二・5の安間義明氏によると「終戦(第二次世界大戦)直前に平井家の水車を譲り受け、のちに水力を電力に換え、安間伸銅所として昭和60年代まで経営していました」とのことでした。現在、伸銅所は閉じ、その跡地には自動車販売関係のビルが建っています。水車の遺構について尋ねると「自宅の裏に古い水神様が祀られています」とのことです。拝見させていただけました。高さ1m余の石祠は全体に苔むし、長い時間の経過を漂わせていました。安間氏宅前の千川上水両岸には20数本のケヤキの高木が整然と並びその中を清





流が流れていきます。

前出『千川上水』では下流の水車を「坂上水車」、その位置を「保谷村葭窪北臺(よしくぼきただい)」と記しています。「保谷村坂上」「同葭窪北臺」は現在の「西東京市柳沢三丁目」に該当します。同地の旧家、野口家の現当主、甚平氏が「私の小さい頃、千川小学校前の橋辺りから千川上水と平行して下流に用水が引かれ、柳沢三・二、現在岩崎家の有料駐車場があるところに、中島飛行機の部品を作っている小さな工場があった」とその場所を指摘してくださいました。二基の水車があった場所は、特定できませんでした。

### 三郡橋と関村分水跡ほか

広大な民間運動場を過ぎ、関前橋交差点まで来ると、右岸前方が大きく開けます。第二次世界大戦終戦まで、中島飛行機株式会社武蔵野・多摩製作所が戦闘機のエンジンを製造する轟音をどろどろかせていた一帯で、現在は広場や高校などが建ち並び、武蔵野市の広域グリーンエリアに様相を一変しています。バス停「電通裏」あたりから、千川上水は右に大きく弧を描き、閑静な住宅街に流を変えます。傍らに立つ標識には「取水口から2.5KM」と記されています。開渠区間のちょうど中間点です。この中間点を過ぎ、最初に架かる橋が「三郡(み)おり)橋」です。かつての新座郡上保谷新田、北豊島郡関村、北多摩郡関前村の三郡が隣接した場所に架けられていたことから、この橋名があります。

三郡橋を過ぎ、千川上水遊歩道の対岸の区道を下流に少し進むと、左側に「練馬区」の標識が立っています。その手前から左に緩やかに弧を描いた細い路地が青梅街道方向へ続きます。この路地が西東京市と練馬区との境界線で、かつてあった「関村分水」跡でもあります。昔、上水本流から水田灌溉用に引かれたのが「分水」で、天明4年(一七八四)に作成された「関村絵図」(井口敏氏所蔵)には、千川上水から「溜井」(現・練馬区立武蔵関公園の富士見池)まで横一線に結ばれた関村分水が描かれています。この絵図から、当時の関村分水は三郡橋付近から取水され、現在の武蔵関公園富士見池付近の石神井川まで流れていたことが推測できます。

関村分水跡を過ぎると、千川上水は自動車往来が頻繁な三鷹通りに架かる「更新橋」下を潜ります。この更新橋の練馬区関町南四丁目寄り、桜の老木の傍らに青面金剛像を祀った庚申塔があります。『千川上水の今と昔』(練馬区古文書研究会編・平成三年発行)によると、この庚申塔は以前は三郡橋近くの武蔵野市域に置かれていた、とのことでした。

### 千川上水施餓鬼亡靈供養塔と屋敷林

更新橋を過ぎると、兩岸の土手にはエノキ、コブシ、シラカシなどの比較的樹齢が浅い小中の高木が目立ちます。ここから「北浦橋」「桂橋」を過ぎ、東北浦橋にさしかかると、練馬区側の堤に、流れを背に建つ石塔が目にとまります。千川

上水で水難死した人たちの霊を慰めるために、近在の人々が寄進して、明治41年(一九〇八)3月に建立した「千川上水施餓鬼(せがき)亡靈供養塔(ぼうれいくようとう)」(総高165cm、最大台石の幅60cm/関町南四・二)です。台石正面には「右ハ田無小金井道」「北ハ関青梅街道々」「左ハ吉祥寺停車場 井之頭道」と刻まれ、昔は道標の役割を果たしていたことを示しています。かつての千川上水には「魔の川」の一面を見せることもありました。

この先の「吉祥寺橋」から、青梅街道と交差する「伊勢(殿)橋」までの約1.2kmが、「清流の復活」区間中で最も創設当時の面影を色濃く残す区間です。立野町側に屋敷森が鬱蒼(うっそう)と繁り、緑陰から響いてくる瀬音を耳に、春秋には四万株のキャベツで覆われる畑の傍らを歩むと、一瞬、時間が逆行した錯覚に襲われます。この屋敷森とキャベツ畑の所有者で、立野町37・6に住む井口利一氏にお話を伺いました。

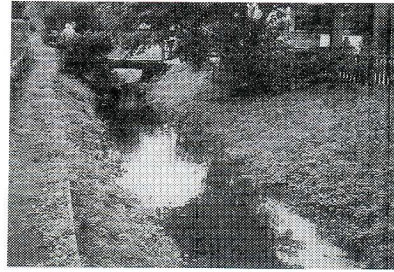
「ええ、昔はきれいな川でした。川底から砂金が見つかることもありました。川番が下流から定期的に自転車巡行にやってくる、私たちが川で遊んでいると、水が汚れるといつてよく叱られたものです。溺死する人も多かった。ですからあの供養塔(千川上水施餓鬼亡靈供養塔)をしじゅう掃除したり、線香をあげたりしているんです……」

井口家を過ぎると、千川上水は立野町



38付近で唐突に暗渠となり、80m余先の石神井西中学校前で開渠、次いでまた延長140m余の「千川緑地」の暗渠となります。「千川上水年度別埋管工事施工状況図」(練馬区教育委員会発行「練馬の水系」)によると、暗渠となったのは昭和33年(一九五八)から34年(一九五九)にかけてです。

**堀割風景と伊勢(殿)橋界限**



車の往来が激しい吉祥寺通りと交差する「千川橋跡」の横断歩道を渡ると、また閑静な風景が開けます。

**「田中橋」を過**

ぎ「久山(きゅうやま)橋」にさしかかると、左側に尾崎家のキャベツ畑が広がります。ここから下流の「竹下橋」までの両岸は堀割のままの形状で、三百余年前、開削直後の千川上水の風景もこうであったろうと、ふと想像力をかきたてられます。

尾崎家現当主の尾崎一氏によると、「少し前この辺に、蛭を復活させるため、エサのカワニナを放流したりしたことがあります」とのことですが、結局、人工養殖は失敗で「開渠区間の終点が、この先の青梅街道

と交差する「伊勢(殿)橋」です。取水口から5km、かつての小名は「出店(でだな)」。

正徳末(一七一〇年代半ば)に作成された「正徳末頃ノ上水図」(千川善蔵氏所蔵)にはこの地点に「水番」という文字が記入され、天保5年(一八三四)刊の『武蔵国多摩郡御嶽山道中記・御嶽菅笠(みたけすげがさ)』には、千川上水を挟んで「水番所」と「二八そば屋」が描かれています。現在、その痕跡はありませんが、かつてここに「水番所」があったことは確かでしょう。

**また、前出『千川上水路図解説』など**

の文献には、この地点に、上井草村、下井草村、天沼村、阿佐ヶ谷村、荻久保村、鷲宮村の六か村に用水を引いた「多摩郡六ヶ村分水」口があったことを記しています。前出の尾崎氏は「私が憶えている分水跡は、伊勢橋から荻窪方向に向かって青梅街道の右側を平行して堀が掘られ、竹下稻荷神社あたりで右に折れ善福寺方向へ向かっています」と教えてくれました。前出『千川上水』には、「(同分水は交差点から)略々青梅街道に平行して走つてをり古い石橋も見られるが、二百米程行くと祠があり、この前からはたゞ形ばかりの溝で、幅も狭く、昔の面影は見られない(後略)」と記しています。尾崎証言と一致します。この「分水」は伊勢(殿)橋付近から青梅街道に平行して流れていたことが、これで確認できました。

現在、千川上水に放流されている日量

一万㎡の再生水は、ここ伊勢(殿)橋で杉並区善福寺方面へ通じる導水管へ七千㎡、残る三千㎡は青梅街道の路面下を潜り「練馬区立千川上水緑道」方向の暗渠へ導かれています。

**千川上水緑道と田中水車ほか**

千川通りと平行して400mほど続く「練馬区立千川上水緑道」の右側で、現在、スーパーマーケットの新店舗建築工事が進められています。また地元住人によると「千川通りの拡幅計画も進行中」とか。近い将来、この界限の風景が大きく変わる可能性があります。

この緑道から先は、暗渠となりますので、文献で往時の千川上水を偲ぶしかありません。「立野橋は、上石神井駅に通ずる道筋に当るが、橋辺に宝永元年(一七〇四)の庚申塔がある」「昭和七年に出来た筋違橋から、川は道の左から右に移る。岸は低く、流も緩やかである」——前出『千川上水』の記述です。この庚申塔は同じ位置に現存しています。しかし「立野橋」は交差点の標識にのみ名を留め、「筋違(すじかい)橋」は歩道の幅の変化などに面影を残してはいても、地名としては名を留めていません。

少し進むと、左側に「練馬区立上石千川児童公園」があり、大きな水車の形をした遊具が目立ちます。かつてこの地にあつて、明治末期から昭和44年(一九六九)年まで稼働していた「田中」(観音山(かんのんやま)水車)をかたどったものです。田中水車は七馬力、杵数43本、

常時半数を稼働させると一日約一・二トンの製粉能力がありました(「練馬の産業」練馬区教育委員会編)。

公園隣のマンション一階にあるコンビニエンスストアの駐車場の傍らに、かつて田中水車で用いていた石製のつき臼が二基無造作に置かれています。一基は植木鉢代わりに用いられていて、これには少し驚きます。コンビニエンスストアのすぐ先に、「宝永二年(一七〇五)の庚申塔」の祠があります。

千川通り左側の歩道は徐々に車道との段差が開き、西武新宿線の上石神井車両基地南側付近では優に1mを超えます。伊勢(殿)橋から両岸に土手を築き、「築樋(つきどい)」としていたところを歩道にしたための段差です。『千川上水探訪マップ』(豊島区立郷土資料館編)では「築樋は」妙正寺川に続く谷がこの付近に入り込んでいたので、それをまたぐために築かれた」と説明しています。

千川通りは、上井草駅西踏切の手前で練馬区主要区道48号線とT字に交差し、踏切を越えます。暗渠下を流れてきた千川上水の水流は、この踏切の手前で一瞬姿を現します。そしてS字状に流れ下り、西武新宿線に架かる鉄橋「千川上水橋梁」の下を潜ります。

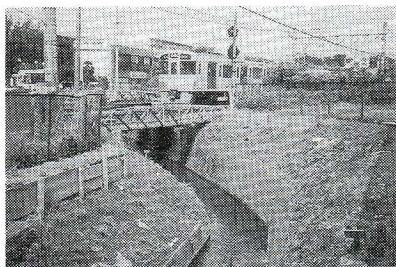
**■ 中流編**

(西武新宿線交差)江古田二又交差点(中流区間は、標高差約12m(上井草50m)江古田38m)のゆるやかな流れです。



昭和26年(一九五二)から昭和41年(一九六六)にかけて暗渠・地下埋管され、グリーンベルトの区間が多いことが特徴です。

開渠部分から富士見台駅南口付近まで



千川上水橋梁

西武新 宿線上井 草駅の西 方二つ目 の踏切付 近に、中 流区間で 唯一の開 渠部分が あります。

西方の上流か

らきた千川の暗渠は、踏切南側の井草通り東脇で顔を出し、結構きれいな水が流れ出しています。通水量は1日約三千tです。すぐ北東に向きを変えて線路をくぐり、千川通りの下で再び暗渠になって見えなくなり。暗渠は、直径1m×長さ2〜3mのヒューム管をつないだもので、60〜70mおきに点検や清掃のためにマンホールを設けてあります。開渠区間は全長40mほどで、川幅は約5mです。鉄道建設のとき、橋梁を短くするために、線路と交差する部分の流路の角度が変えられました。この鉄橋が千川上水橋梁です。

千川通りを斜めに横断した流路は、道路北側のほぼ歩道部分を通っています。千川南側の下石神井四一28には、馬頭観

世音像が建っています。次の信号から八成橋までは、千川通りが練馬と杉並の区境です。上井草駅の北方には、鬱蒼と茂る志村家の屋敷林(井草五一五)が続きます。

200mほど東進すると、ちひろ美術館の案内看板が見えてきます。この付近の千川北側が東京同潤社糸線器械工場跡です。下石神井四一10のマンション敷地と植木畑が工場建物の中心地でした。同四一九の畑と運輸会社の営業所付近まで工場敷地が続き、約千坪(約三千三百m<sup>2</sup>)あったといわれています。間の道路は後に通されたものです。同社は、明治10年代に興就社(石神井台一・15)と前後して誕生した民間製糸工場で、短期間の操業とはいえ近隣の養蚕農家に大きな影響を与えたようです。糸を晒すときなど多量に水を使用する製糸工場のため、興就社が大半を地下水に頼ったのに比べ、好立地を活かし千川上水からの分水でまかなったそうです(「千川上水と製糸工場同潤社」『千川上水の今と昔』(前出))。

千川通りが新青梅街道と交差する井草四丁目交差点北東角のファミリーレストラン前(下石神井二・3)に、東京都の河界標識があります。今回の調査で付近に6カ所確認されました。昭和40年(一九六五)頃、このあたりの暗渠工事の後に埋められた標識で、千川上水の北岸または土手の端の跡を示すものとして、小さいながら貴重です。

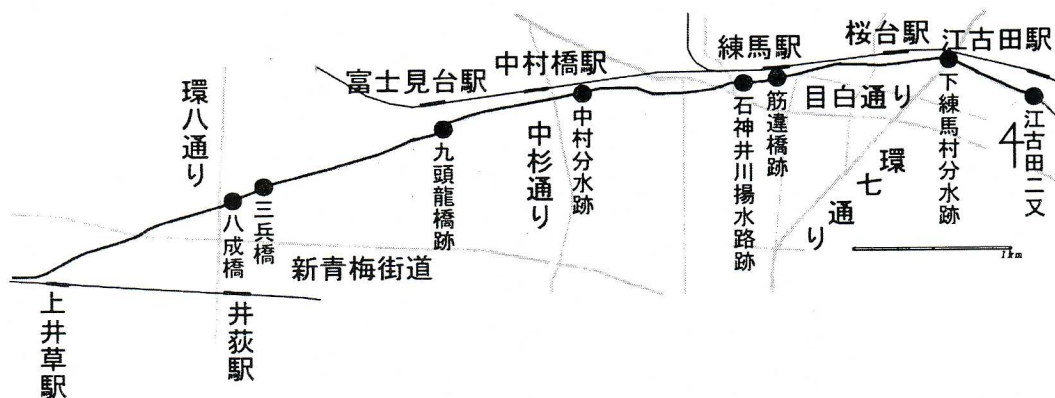
住宅展示場を過ぎると、集合住宅(下

石神井一・8)敷地内に、庚申塔(元禄9年・一六九六)があります。以前は別の場所(下石神井一・6)にあったものが移されてきました。

さらに下流の千川通りと環八通りが交差する地点が、平成11年(一九九七)4月に開通した井荻トンネル建設時の流路変更地点で、マンホールが車道内の1個から歩道部分の2個へと移されています。環八通りの1本東の信号が旧早稲田通り八成(はちなり)橋交差点です。ここに石造の八成橋がかかっていました。橋名はバス停に残されており、また、近くの駐車場隅で散見される石材の破片は、橋の構造物の一部といわれます。

八成橋交差点の北東角の駐車場の東側に八成(斎藤)水車跡(南田中一・22)があります。水車小屋が建っていたのは、千川北側の斎藤家の北西隅だったそうです。現・環八通り交差点付近の分水口から、現在、斎藤家一族の2軒の家(南田中一・21)が建っている地所の北側に回し堀を設けて水車を稼働させた後、トンネルで千川上水に戻されていました。千川沿いの練馬区内で確認されている4基の水車の中の1基で、水車の歯車、石臼などが斎藤家に保存されています。

八成橋から富士見台一丁目までの間は、千川南側も練馬区です。八成橋から約150m東のところ三兵衛橋がかかっていた地点で、交差する一方通行路が長命寺道です。この千川北側に「右長命寺道」道標が建っています。現在は交差点の北東



角(南田中一・15)に西向きで建てられています。以前は小道の西側に東向きで建っていました(なお、平成16年現在、工事に伴い道標は一時的に撤去しています)。下井草方面から北上して三兵衛橋を渡り東高野山長命寺(高野台三・10)に至



る参詣の道が長命寺道と呼ばれるようになりまし。ここから千川南側には育英工業高専(平成17年4月移転予定)の独特の色彩で描かれた約350mに及ぶ長い塀が続きます。

さらに東進すると、千川北側の富士見台一・7と5の間に水路敷跡らしき細い道があります。これを北にたどると都営住宅(富士見台二・13)付近にあった池に達し、その池から流れ出た水を導くため、水路は西武池袋線を越え最後は旧貫井川に注ぐ小川につながっていました。

現在は埋められて跡形のないこの水路は、地元で「ほりっこ」とも通称されていたようですが、分水記録には見当たりません。千川上水から旧池までの間は、洪水時の溢水を排水する“悪水堀”のようなものだった可能性もあります。

少し下流の都営富士見台一丁目アパー  
ト1号棟(富士見台一・4)付近が、鴨下(旧渡辺)水車跡の推定地で、千川児童遊園付近とする文献(豊島区地域地図第六集(豊島区立郷土資料館)など)もありません。しかし、地元の方によると、もう少し下流地点の1号棟東端の電話ボックスあたりだったそうです。大正9年(一九二〇)に田柄用水沿いの三原台に移転した後も、昭和初期まで水車小屋の土台や水路跡が残っていたそうです。

この先で千川は中野区内を通ります。西武池袋線富士見台駅入口交差点の現五差路上が九頭龍(くすりゅう)橋跡です。石神井方面と練馬方面を結ぶ重要な石造

の橋でした。付近に、今は中村北四・12に移設された九頭龍弁財天が祀られています。また暗渠工事の際に約100m上流から道路が新設され、それにもない水路が北側の現・歩道部分に移されています。千川中流部の暗渠化完了時期は昭和41年(一九六六)頃ですが、それまで八  
成橋から九頭龍橋の間の千川沿いには細い道しがなく、北側の都道が主要道路でした。この道は、沿道の富士見台一・14に庚申塔(享保15年・一七三〇)があったことから、庚申道と呼ばれていました。

#### 富士見台駅付近から目白通交差点まで

富士見台駅入口から東に向かうと、千川通りと富士見台通りの合流地点(貫井一・43)付近からグリーンベルトが始まります。この付近は昭和31年(一九五六)に暗渠化され、同時に整備されたグリーンベルトのほぼ下を千川が東へ流れています。中村北四・12付近のグリーンベルト上には、前述の九頭龍弁財天ほか5体の石造物が集められ、祀られています。堂宇敷地には九頭龍弁財天等の由来が記された石碑(昭和49年・一九七四)が建立されています。この辺から始まる桜並木は、毎春多くの人たちの目を楽しませてくれます。

300mほどで中村橋跡です。現・中村橋交番(中村北四・2)付近の千川上水にかかっていた橋で、大正13年(一九二四)に開業した駅の名前に橋名が採用されました。中村橋跡を出て北に200mほど歩くと、貫井一・6の三差路の角に庚申塔(宝

暦2年・一七五二)と灯籠(文化10年・一八一三)が建てられています。当初は現在地より西方の上練馬村と中村の村境(貫井一・38)にありましたが、大正4年(一九一五)、武蔵野鉄道(現西武池袋線)の開通により現在地へ移されました。

中村北三丁目交差点付近に、中村分水口跡があります。新堀とも呼ばれたこの分水はマンシヨン(中村北三・9)と金物屋(中村北三・3)の間を南下し、昭和8年(一九三三)から16年の間に蛇行した区画整理前までは道路の西側を蛇行したのち南東向きを変え、西貝宅前の角地(中村三・1)にある大山不動(明王)と稻荷(社)との間を流れていました。

垢離とり不動とも言われたこの大山不動は、現在地には暗渠工事の行われた昭和31年(一九五六)に戻されました。西貝氏によれば50年間程、分水口付近の千川南岸、現・中村不動の10mほど南西の歩道付近に建てられ、講員の雨乞い行事の水垢離場となっていたそうです。

分水口の少し東のグリーンベルト上に金属製の中村不動(明王)を祀った堂宇があります。さらに進むと千川南に材木店(中村北二・19)の堂々たる昭和初期の商店建築が目に入ります。このあたりで千川上水は、明治13年(一八八〇)測量図では蛇行していたものが、その後、直線的に流路変更が行われたようです。中村二・19の東角の庚申塔(安政12年・一八〇〇)は現在所在地未確認ですが、南蔵院に移されているそうです。

千川通りと目白通りが交差する直前の千川南側、マンシヨン(中村北一・2)と駐車場(豊玉北六・19)の間に、中新井村分水(上新街分)跡の水路敷があります。旧・中新井村への3本の分水のうち最上流部に位置し、最大水量を供給していました。旧村境を南下し、学田公園付近にあった池を経て中新井川へ注いでいました。

この付近は低地で水にまつわる事故が頻発したこともあり、川施餓鬼供養塔(明治15年・一八八二、水車経営者・矢島弥平次の刻名)が建てられていましたが、昭和31年(一九五六)、暗渠化時に、近くにあった「左中村南蔵院」の道標を兼ねた笠付地蔵(破風屋根付角柱地蔵)と一緒に南蔵院(中村一・15)に移されています。グリーンベルトはここで一段落です。道路北側を流れてきた千川上水は、清戸道(現・目白通り)千川通り)と合すると、南側に移ります。水死した子供たちの供養のための日川地蔵(昭和15年頃・一九四〇)は、元々は豊玉北六・14付近の千川北岸にありましたが、暗渠工事と道路拡幅にもない現在の千川通り北側(現・マンシヨン前、練馬三・1)に移され、さらに昭和61年(一九八六)、マンシヨン建設時に南蔵院へ再移設されました。

少し下流のスーパーマーケット(豊玉北六・13)前あたりが、石神井川揚水路合流点でした。千川通りの向かい側、きもの店(練馬一・6)と洋服店(同一、



7)の間を北西に向う小路が揚水路跡です。これは昭和10年(一九三三)に設置された揚水路で、下流の工業用水としての千川の水量不足を補うために、石神井川の水をポンプで汲み上げて千川に引き入れ増水するためのものでした。「戦時中揚水路」と記した資料(「水車分布之図」『田柄用水をたずねて』一九七七練馬区社会科部臨時見学会資料)があります。

この付近からは練馬駅前の繁華街が続きます。千川南側のビル(豊玉北五19)と向かいのビル(豊玉北五32)の間を北上してきた新井薬師道が、千川通りに斜めに交差します。この道は、清戸道や北西の練馬城跡(としま園)方面から新井薬師寺(中野区新井五1)に向かう信仰の道であったほか、四谷方面と大泉方面を結ぶ古道の一部でした。

50mほど下流の千川通り南側のビル(豊玉北五19)から北側の木材店(練馬一5)に向かって、千川上水は南西から北東へ斜めに道路を横断し、ここに筋違(すじかい)橋がかかっています。橋のたもとにあった橋供養正(聖観音(安永3年・一七七四))は、橋の竣工と人馬の延命を祈って建立されましたが、昭和28年(一九五三)の暗渠化の際に東神社(豊玉北五18)に移されています。

練馬駅付近から江古田駅付近へ

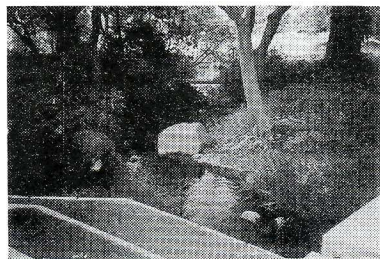
練馬駅南口から東に向かうと、練馬消防署前交差点の東側、千川通りの南側(豊玉上二27付近)が、練馬区内の千川沿いにあった四基の水車のうち最下流部に

位置した矢島水車跡の推定地です。筋違橋のたもとから回し堀を設け、現在の消防署と警察署の間を引水し水車を回していたほか、余水の一部を南方の豊玉中三丁目方面に引いて現・練馬郵便局南方にあった池から流れ出ていた小川につなぎ、灌漑用水としても利用していたようです。練馬消防署前交差点の東から復活したグリーンベルト上(桜台四・21付近)に、清戸道と千川上水の説明板があります。この付近が武蔵高等学校編『千川上水』(前出)に記されている練馬宿の東端だと思われま。

現・桜台駅前交差点の丸山道(桜台通り)が千川を渡るところには、三枚の石を渡した三枚橋がかかっています。そのわずか下流の千川南側、果物店(豊玉上二・20)と喫茶店(同二・15)の間に、中新井村分水(下新街分)跡があり、豊玉第二小学校の北側まで、現在も水路敷が残っています。桜台駅南口信号付近のグリーンベルト上には、千川通りに桜を植える会によって昭和62年(一九八七)に建てられた桜の碑(桜台一・4)があります。暗渠化後に再び植樹され復活した桜並木の記念碑です。千川通りからわずか100mほど北側のマンション(桜台一・12)の北東角には、年代不明の馬頭観世音像があります。

環七通り桜台陸橋下の西側の側道が、下練馬村分水跡です。羽沢分水とも呼ばれ、北上して羽沢三丁目付近で石神井川に注いでいました。付近の住民の方に聞

いたところ、西武池袋線を渡って1本目の道路までは、環七通りの西側の側道が流路、その先は旧・下練馬村方面へ向かう古い道の東側に沿って、一九六〇年代中頃までドブ川状態ながらも水路が残っていたそうです。従来、分水口は栄町15付近とする資料(『千川上水探訪マップ』一九六六 豊島区郷土資料館)がみられましたが、その方の話をもとに古地図を精査したところ、現・環七通り西側の側道交差点、桜台一・1付近とした方が正確だとみられます。



環七通りから約40m東の地点で分水し、武蔵大学構内(豊玉上一・26)を流れていたのが中新井村分水(北新井分)跡です。旧制

武蔵高校時代に「濯川(すぎがわ)」と命名されましたが、昭和35年頃(一九六〇)、千川の通水停止によって放置されました。その後、雨水などを利用して循環式の清流を復活させ、かつての分水の姿をよくとどめています。また、同大学の武蔵学園記念室には、千川上水に関する貴重な資料や「千」の字が刻まれた境界石などの遺物が保存されています。

武蔵大学前のバス停と正門を過ぎると、千川通の北方約50mに武蔵野稲荷神社

(栄町10)があります。拝殿西奥の本殿(年代不詳)が建っているところは、種々別説がありますが円墳跡ともいわれ、その周囲に一部現存する周濠をめぐらせ、千川上水から水を引いていたそうです。再びグリーンベルトに戻るとまもなく江古田二又交差点です。清戸道と埼玉道(高田道)の分岐点で、現在はバス停の名を残すのみで五差路になっています。交差点角の酒店(旭町一・75)前に、千川堤植桜楓碑(大正4年・一九一五)が建てられていましたが、暗渠工事と道路

拡張のため、浅間神社(小竹町一・59)境内に移されました。同碑には、下練馬村ほか三方村の有志が、大正天皇の即位を記念して千川沿い約7kmに千六百本ほどのソメイヨシノとカエデを植えたことが記されています。参道は江古田駅設置の際に分断されましたが、元々は千川通りから北へ約200mにわたって続いていた。千川上水は、江古田二又の西側から交差点南東側に向かって千川通りを斜めにくぐり、道路南側に移っていました。現在も都建設局が設置した通称「亀の子」印のマンホールの位置で確認することができます。

下流編

(江古田二又交差点より千川上水公園) 江古田二又交差点より下流区間は、下流に向かえば向かうほど暗渠化された時期が早い。水車をはじめ開口時のこ

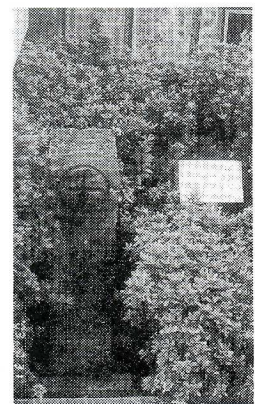




とを知る人も少なくなってしまうが、ところどころにかつての様子を示す遺構が残されています。

**二又交差点から南長崎交差点**

水路はここで道路の北側から南側に移ります。ここから200mほど先の練馬区立旭丘地域集会所(旭丘一・58・10)の入口に㊦印の境界石があります。これは江古田二又交差点付近にあったものを平成3年(一九九一)にここに移設された



ものです。さらに100mほど先の旭丘一・38と45との間を西に向かう路地が江古田分水の跡なのですが、今はその痕跡を留めていません。この近くの堤には千川子育稲荷がありました。昭和13年(一九三八)2月に現在の旭丘一・37に移されています。

ここから350m先、練馬区と豊島区との区境(旭丘一・4と南長崎六・10)の細い路地がかつて能満寺方面に流れていた分水の跡です。ここから100mほどで南長崎交差点に着きます。ここで水路は直角に左折して、北東に向かって流れます。現在、交差点角にはファミリーストラがあり、かつてはここには水番所があり、その付近に地蔵尊がありました。この地蔵尊は、大正14年(一九二五)、上水の川ざらいの際、付近の川に沈んでいたのを拾いあげて祀ったものだといわれ、現在では、旭丘二丁目の能満寺へと移されています。また、ここからほぼ南東に向かって落合(葛ヶ谷)分水がありました。この分水は灌漑用の分水で、西落合一・二丁目を経て、妙正寺川まで、約2kmの分水でした。

**南長崎交差点から谷端川分水跡**

交差点から約250mで西武池袋線の踏切を渡ります。この踏切を越えたところから線路に沿って能満寺方面に一時分水されていました。

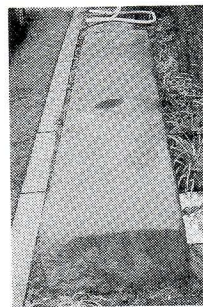
その先豊島区立千早中学校の手前が岩崎水車跡です。現在では、水道端派出所と中古車販売店の間の路地が水路跡と思しき痕跡を留めているのみです。この付近から水路の両側の土地が次第に低くなり、水路は「築樋」となっており、隣の水車道との差が1m以上高くなっています。千早中学校の向かい側のコンビニエンスストアの右側には、道路面よりさらに1.5mほど低い路地があります。これが石神井川に流入する水路で千川上水と立体交差していたのだといえます。千川上水の水路とこの分水跡の路地は高低差が3m近くあり、立体交差の話もうなずけます。

都立牛込商業高校の正門を過ぎると、水路敷には帯状のポール練習場・児童遊園が続きます。その間に挟まれて庚申塔四基が祠に祀られ、香花が供えられています。この庚申塔は昭和43年(一九六八)頃まで五基あったものですが、ある日姿を消し、昭和52年(一九七七)3月、練馬区大泉町の山林に放置されていたのが発見され、この庚申祠とともに昭和52年(一九七七)10月に現在地に安置されたものであり、元の場所より上流に移されています。

そこから50mほど先の交差点が元の庚申橋であり、豊島区立千川親水公園の

入口あたりが庚申塔のあった場所になります。この先、桜並木の緑道に続く公園の雰囲気は開口時の面影をとどめています。

この緑道一帯が終わると、水路は千川管理地と書かれた看板が立っているフェンスに囲まれた中を通ります。フェンスの外側には千川が流れていた当時、橋板に使用されていたと思われる長さ2.5mほどの石が3枚無造作に置かれています。



武蔵高等学校 校編『千川上水』(前出)の記載では、この

辺りが釣堀のあったところになります。しかし、そのすぐ横にマンションが建ち、ここに釣堀があった形跡は見受けられません。ここからすぐ、水路と36号線との交差する辺りが、千川上水の分水の中で最大のものである長崎分水跡です。この分水が谷端川(旧小石川)の出発点なのですが、現在では、ビルや住宅が並び、その跡は確認できません。分水の流れに沿って少し行くと有楽町線千川駅で、この辺りの土地が低くなっているのが確認できます。

**谷端川から青山水車跡**

水路は36号線を横断し、マンションと住宅に挟まれた細い路地を進み、その先の六差路を右斜め、都立板橋高校の前をすぎます。現在、高校前からの水路には、桜並木とそれを取り巻く低木が植えられ



グリーンベルトとなっています。

この水路を進んでいくと五差路に出ます。正面に見える駐車場の隅に、電柱に隠れるように庚申塔が建っています。そのまま進むと右手に板橋区立交通公園があり、その30mほど先の左手、大山西町44番の民家の生垣の基礎部分のコンクリート壁に半分以上埋没した境界石が④のマークを覗かせています。

水路は細い路地をそのまま進みますが、道路が二又に分かれる手前の駐車場(大山西町47)の片隅にも境界石が斜めになつて残っています。この角を水路と別れて左に折れ、20mほど進むと大山西銀座商店街に出ます。その向い側の一角に『千川上水』(前出)に記載されている元緑地蔵が建っていたと思われる場所があり、すが、その痕跡を見ることはできません。

水路に戻り、路地を50mほど直進すると、大山西町13番の塀に突き当たります。水路はその民家の下を通っています。迂回して進むと児童遊園が右側にあり、その中央部に大きな鉄板が二枚並んでいます。この鉄板が千川の開口部であり、千川上水出張所跡です。今でも、第四建設事務所が管理しており、担当者が掃除に来るとのことです。その傍らに弁天祠(地元の人には水神様と言っている。)があります。祠はフェンスで囲まれており、中の様子がかがいがい知ることではできません。この商店街で商店を営んでいる主人に話を伺ったところでは、その昔、この祠は近くのアパートの裏手(つまり、

千川が流れていたあたり)に位置していたが、地元住民の働きかけにより、昭和58年(一九八三)3月、現在の位置へと移されたのだといえます。『千川上水路図』(前出)等によれば広瀬歯科医院のあたりにあったとされる田留水車跡の位置も、周辺住民にお聞きした範囲では水車そのものの存在を記憶している人はいなかったため、水車の存在場所は確認できませんでした。

水路はこの先で川越街道を横断して大山西方面へと向かいます。アーケード商店街と交差する場所が元の大山橋です。昭和57年(一九三〇)頃、暗渠化されたとき、この大山橋は姿を消しました。

商店街を斜めに横切り、踏切を越えると東京都老人医療センターの前に出、板橋区立産文ホールと板橋第一中学校の間を通ります。その先の板橋税務署付近には青山(秋山)水車がありました。

**青山水車跡から千川上水公園**

水路の本流は山手通りを渡り、板橋区役所を右手に見て、国道17号を横断します。ガソリンスタンドの先の旧道を左に入り、半円状に迂回しながら再び17号に戻ります。この迂回地点のちょうど中ほど、駐車場になっている場所が、料亭文豪屋敷跡(板橋一丁目)であり、その前が喜内古(喜奈子)屋水車跡だそうです。

水路は再び国道に出、しばらく道なりに進んで、板橋三・3付近から斜めに国道を横断して板橋郵便局裏の道に入りま

す。この辺りから、旧中山道とほぼ平行に流れ、裏通りの閑静な住宅街の中を通ります。350mほどで板橋一丁目児童遊園の前に出ます。ここには板橋火薬製造所(後の造兵廠・板橋浄水所)への分水口がありました。この周辺は上水跡の道路が左右両側の土地に比べて著しく高く、いわゆる尾根上を流れていたことが一目瞭然です。水路はJR板橋駅前ロータリー広場の中央部を通り(中央の緑地帯の中に、それと分かるマンホールを見ることができず)、そのままほぼ直進して埼京線を潜り、北区滝野川6丁目と7丁目の境界線上の水路に続きます。もちろん人は潜れないので旧中山道で踏切を越え、最初の細い(一人一人がようやく通れます)路地を右手に入ると水路に戻ることができず。埼京線のすぐ東側になるここに、石神井川に流れる分水があります。ここには千川マークの長方形型のマンホールが二枚一組で90度の角度で二組あり、見るからにそれと分かります。

そこから100mほど行くと、交差点の角に水路に向いたかたちで馬頭観音の祠があります。水路は、ここから中山道をやや離れるように迂回していますが、もとの水路はそのままほぼ直進していたようですが、明治期に入ると板橋宿付近の人家が次第に増し、上水に汚水が入り込むおそれがでてきたため、川を迂回させたそうです。(板橋区教育委員会発行『いたばしの河川』一九八六)

昔、「千川の怪物(オオサンショウウオ)」が捕獲されたという逸話が残されています。・・・寛政13年(一八〇二)辛酉6月13日、板橋宿のうら通千川の堀にて、怪物をとらへたり。先その形黒く長き頭より尾まで三尺四五寸もあるべし。背中は黒き内にブツブツと一際黒く、頭は鱗に似て平く大城きに、目は長くして至て細し。口の大きき舌ばかり、前の両足は指四本、後ろの両足は指五本なり・・・(津田順敬『本朝諸国風土記』)

そのまま明治通りまで進むと「千川上水分配堰」(明治十五年)と刻まれた石柱が立っています。千川上水はここから王子方面へと分配されていたのです。

明治通りを挟んで石柱の対岸には、豊島区立千川上水公園があります。かつての旧千川上水浄水場です。ここを経由して、六義園や本郷・湯島方面に給水していたのです。公園には現在もバルブ(仕切弁)が残され、説明板も立っています。

